

（報告）

ア 史跡 蜷塚遺跡保存活用計画の策定について（中間報告）

※文化財課長から資料に基づき説明

（意見無し）

イ 第3次浜松市子供読書活動推進計画の策定について（素案）

※中央図書館長から資料に基づき説明

（田中委員）中央図書館のリニューアルはとても楽しみである。以前に住んでいた姫路市では、幼児期の絵本の読み聞かせに力を入れており、読書週間に図書館へ本を借りに行くのと市のキャラクターがプリントされた不織布バッグが貰え、バッグ欲しさに周りの友人達も通っていた。乳幼児期からぜひ良本に親しんでもらいたいため、浜松市も何かおこなってはどうか。おでかけ絵本講座等に参加したことがあるが、若い世代の方々にぜひ聞いてもらいたい内容だった。認知度が低いように感じるため、ぜひ広く案内していただきたい。また、幼稚園や保育園にも良い本がたくさんあるのに、貸出があまり進んでいないように感じる。図書館と連携しながら乳幼児期にたくさんのお本に触れていただきたい。

（中央図書館長）浜松市でも、読書活動の第一歩として乳幼児の読み聞かせが重要と考えている。今回の推進計画は、発達段階に応じたつながりのある取組を前計画より強く意識して作成した。乳幼児期のブックスタートに始まり、小中高と発達段階に合う本を選び、最終的には自分自身でみつけれられるようになって欲しい。

（安田委員）本計画の中でデジタルに関して言及しているか。

（中央図書館長）本計画の中では、42ページの「情報を読み解く力を身に付けた子供」という部分でICTの活用についてふれているが、具体的な施策については記載していない。学校と連携しながら、学びにおける活用や読書活動における活用方法を模索していきたい。

（安田委員）電子書籍がこれだけ普及しているのだから、本計画の中でもぜひ取り上げて欲しい。どちらかを否定するのではなく、紙書籍、電子書籍、両方の良さを認めた上で、読書活動を推進していただきたい。タブレットで絵本を読み聞かせるお母さんが増えていると聞くと、紙で見る絵本はタブレットにはない良さがある。その良さも取組の中で伝えていただきたい。

（黒柳委員）中学生くらいまでは本に親しむ機会があるが、高校、大学、社会人になるに

つれて本離れが加速している。この年代の人たちにどう活用してもらうかが課題である。親自身が本に親しんだ経験が乏しいとその子供達に繋がっていかない。乳幼児期から大人まで読書活動が維持できるようにすることが大事であると思う。また、電子書籍が普及して本に触れる機会が増えた気がする。電子書籍をうまく活用しながら、紙書籍の良さも認識してもらえらるような取組をお願いしたい。

（神谷委員）自身の幼少期に比べると、今の子供達の方が本に親しむ機会が増えているように感じる。インターネットで検索してしまうとそれ以上の広がりがないが、図鑑や辞書で調べ物をする、そこから興味が広がることもある。これが紙書籍の良さであると思う。読書環境の基盤はやはり家庭であると思うため、親子で本に触れあう機会が増えるといいなと思う。

（黒柳委員）小中学校へ読み聞かせボランティアに行っているが、保護者からどのような本を読んだらよいかよく質問を受ける。特に中学生に勧める本を探すのが難しい。推薦書の一覧があるとよい。

（中央図書館長）読み聞かせボランティアに向けたお勧めの本のリストはあるが、中学生対象のものは少ない。中学生くらいになると、興味関心や感性が個々に違い、リスト化しづらい面はあるが、可能な限りリスト化していきたい。